

〈共訳〉徐志摩「西湖¹記」

高 媛・劉 海 燕・徐 青・劉 斯 微
王 艷 珍・金 靄 卜・丹羽 一郎・星野 幸代 訳²
星野 幸代：責任編集

解題

徐志摩(1897-1931)は浙江海寧の人、近現代中国を代表する詩人。今日もその作品の影響は強い。米、英に留学、帰国後は北京大学教授などを歴任する傍ら、知識人グループ新月社の中心として雑誌『新月』等を主編し、新月書店を興し、自ら詩・散文集を発表し一世を風靡したが、飛行機事故で急死した。

「西湖記」は1923年9月7日～10月28日の日記の体裁をとる西湖滞在記である。胡適をはじめ汪精衛、郭沫若、田漢、鄭振鐸ら、後に政界、文芸界で活躍する人物が続々と登場し、徐志摩の周辺には知識人界のエリートたちがひしめいていたことを物語る。「西湖記」は、その情景描写に詩人・徐志摩の詩想を見出すことができるとともに、知識人交友録としても実に興味深い。まだ不明な点が多く、諸氏の御教示を請いたい。

初出は徐志摩の死後、1934年10月～11月『人間世』に連載され、全編としては1947年『志摩日記』(上海晨光出版公司)に収録。本稿は天津人民出版社2005年『徐志摩全集』第五卷、二七九～二九三頁によった。

九月七日

先ほどもう一人の「丫姑太太」³が来た。手に一歳半⁴ぐらいの女の子を抱き、身の回りに五、六歳の男の子が付きまわっている。男の子は実の子で、女の子は育嬰堂⁵からもらった養女だ。彼らは何と「若い夫婦」なのだ。若い嫁は姑の乳を飲んで、手と足をばたばたさせてご機嫌だ。

明日は祖母の「回神」⁶の日だ。良房⁷の患者はすぐに倒れそうだ。積年の回肺病があり、更に「風症」⁸にかかり、その上、家族全員がめちゃくちゃな状態に陥っている——まるで毒菌工場のものであり、彼らと同居するのはかなり危険なことだ。もし、今晚か明朝死んでしまったら、大広間で納棺するのは避けられない。うちの「二通」を挟んだら⁹、まったくひどいことだ。彼女が死んでしまったら、あの一家には使いものにならないアヘン中毒[原文「黒籍」]のおやじと、一群れの枯木のように痩せ細って肺病病みの

ような子供しか残らない。

訃報にあった「継」という字について、町の人たちの中で議論が沸騰しているようだ。もし「継」という字をつけなければ、孫大奥様のことを軽蔑していることになる。噂を広めた彼らを、姑父は単なる海棠の木の上の騒がしいスズメのように見なしている。同じように無神経で、同じように人を嫌がれるからだ。僕たちはこれについて名士に手紙を出して教を請うたところ、適之¹⁰はもう返事をくれた。彼によると、古代の礼法においては先妻と後妻とはもともと区別がなく、「継妣¹¹」というしきたりは、後代の人が継母を蔑視して作られたに違いないそうだ。彼の知るかぎりでは、古書において全く根拠がないらしい。

九月二十九日

この一時的な生活によって、気分が変わった。憂鬱から愉快に転じたとまでは言えないけれども、少なくとも沈鬱から活発に転じた。最初、父自身もひどく鬱々としていたのだが、ある日例の遊覧船をきれいに片付けて、叔薇¹²兄弟たちを誘い、東山の裏の方までずっと行って、楡橋を過ぎ、横頭景転橋をまわり、最後に電灯工場を見、ようやく帰ってきた。その日はとても楽しかった。塔影河の岸辺の両側で、霜をうけた紅葉を一、二枚見つけた。水中から二枚掬い上げ、まだすっかり赤くなっていないけれども、色がみずみずしくて¹³可愛い。紅葉狩りは風雅なことである。(前日、絳義¹⁴、阿六 [不詳] と一緒に、フルーツ月餅、バラ酒¹⁵を持ち、東山の後ろ側へ紅葉を探しに行った。俞家橋に立ち、きろきろ見てみたけれども、紅い色どころか、楓自体なかなか見つからなかった。それで、大変失望した。その後、山を越え、宝塔まで上り、存分に英気を養った¹⁶。もう日が暮れてきた。西の方に、幾筋かの青い色しか残されていなかった。月が昇った。僕たちは、塔の庭の外側に沿ってゆっくり回し降りてきた。途中、問松亭で一休みし、従兄弟3人で焼酎一本を飲み切ってから、ようやく帰った。山裾で、先月末、知り合った乞食の友に喜捨すると、約束の冬服はどうしたと聞かれた) 菱の池へ菱を買いに行くのも面白いことだった。鉢孟峰の下は、全て菱の池だ。船が通る時、みずみずしい菱の池で、丸い菱桶に座った人が菱を取るところを見た。僕たちは菱を買いたいと騒ぎたて、一卓分の菱を買った。青いのと赤いのが、テーブルにいっぱいになった。“樹頭鮮”¹⁷は本当に美味しく、なるほどその名の通りだ。薄みどりのをいくつか選び、持ち帰って母に食べさせると、母も美味しいと言っていた。

これが僕たちの初めての意にかなう活動であった。

八月十五日の日、もともと適之のところへ月見に行くことと約束していたのだが、着くのが遅く、絳義¹⁸もそばにいたので、烟霞¹⁹へは行かなかった。その夜、月が見えたり隠れたりしていたけれども、湖で楽しく好きだけ遊んできた。帰り路では、満天黒雲が垂れ込め、切れ間もなく、中秋の気配は少しも見えなかった。そのとき僕は胸がいっぱ

いになってしまった——去年のインド洋上での中秋のことを思い出したのだ。一年の歳月。胸が締め付けられ、泣くよりも悲しい。一日の黒雲であり、そうだ、何の光明の気配もなかった。

【高媛 訳】

僕たちは清華で部屋を取ってから、すぐに車に乗って楼外楼に行った。お腹いっぱい食べて、思う存分飲んだ。桂花栗子の季節はもうすでに過ぎてしまったので、香りも歯ざわりも落ちていた。九時あたりになると、月がついに群雲を抜けて出てきた。その満身には勝利の輝きがかかっている。僕は窓にもたれて、外の湖がしだいに黒色から青色に変わり、青色の中に白色が現れ、その東南の方がすでに明るく広々としてきたのを見て、嬉しくて歓声をあげてしまった。僕の喜びは、単に月が現れたためではない。最も痛快であったのは、失望中の満足だ。空いっぱい黒雲であったが、もともと雨が月にかわり、憂鬱が光明にかわると思っていたのだ。僕は酔っ払って、その後、夢の中で中秋を訪ね、団らんを探すつもりだった——夢の中にはすべてのものがあるのだから。

僕たちは白堤に上がり、月見をして湖を眺めていた。月の周りに三つの光の輪があつて、これは、おそらく月暈つきくというものだろう。

月は出てから一時間も経たないうちに、再び黒雲に呑み込まれてしまった。しかし、僕は、彼女〔月〕はまだそれを除き清める能力を持っていることを望んでいる。彼女が一、二時間以内に青い空を覆った妖魔を一斉に、天の向こうに追いやってしまうよう望んでいる。彼女はできるだけその清い輝きを明け放ち、月を愛でる僕たちを思う存分陶醉させてくれるだろうと期待している。そうなったら、僕は三つの印月潭と雷峰塔の美しい影の中で妖精となろう、永遠に岸に上がることのない妖精になろう、それが本望だ、望むところだ。

「賊相」²⁰は留守にしており、結局蛮子仲堅²¹を捕まえた。嬉々としておいしいものをたくさん買った——広東風の餡が入った月餅とか——船を賃借りして、まっすぐ湖心に出発した。

三潭印月に上陸して栗や蓮を買って食べた。九曲橋の上に座って世間話をして、湖上の対聯を言い始め、「康聖人」²²の悪口を言った。その後、向こうへ行くと橋の上に座っている三人が話していて、机の上に茶碗が置いてあるのを見つけた。僕は仲堅に彼らは面白いねと言おうとしたところ、あちらの翁の洪い声に聞き覚えがあったので、目をこらして見ると、なんと彼は「康聖人」その人だった。

翌日、僕たちの出発は遅かった。絳義は煙霞洞に行くことに賛成し、途中、僕たちは雷峰塔を遊覧した。僕は雷峰塔を見たことがなくて、この塔の形、色と位置は本当に言葉で表せないほどの神秘的な荘厳さと美しさがある。塔の内側にある四つの大きなレンガの柱はすでに取り壊されて、円錐をさかさまにしたようになっており、見るからに危

なっかしい。駕籠かきは「白状元のお墓は塔のすぐ前の湖の傍にあります。その左側の草むらにも墓が一つあって、その前に石碑があって、白娘娘のお墓とされています」と言った。僕は回り込んで行って見たかったが、その小道はイバラが絡んでいて通れなかった。雷峰塔の下に七、八人の痩せこげた和尚がおり、僕たちを見ると、一斉にぼろぼろの袈裟を広げ、念仏を唱えながら、お金を無心した。それが意外に詩的だった。橋に上がろうとすると、一丈余りの蛇をつかんで、「放生」と叫んでいる者がいた。それは小青蛇なのだと言う。僕はふと心を動かされ、二角の金を出して、彼にその蛇を下の蓮池に投げ捨てさせた。でも夜にもならないうちに、彼女はまた彼に捕まえられるのではないかと心配だ。

石屋洞に入ると、初めて金木犀の香りがした——この香りはここ数年嗅ぐことができなかった。

煙霞洞についたが、主は留守だった。適之と高夢旦らは朝早く花塙へ遊びに行ってしまったのだ。僕たちはお茶を一杯だけ飲んで、大きな紅葉を数枚拾っただけで、急いで山から降りた。バナナと月餅でご飯にした。

龍井に着くと、泉をさっと見てからすぐに帰った。

一昨日車の中で雷峰塔を思い出し、杭州の白話で詩を一首作った。

あれは白娘娘のお墓です。

(船頭はつる草の奥の方を指しながら)

お客さん、西湖の美談をご存知でしょうか

白娘娘は多情な妖怪です。

彼女は多情のためにかえって苦しい目に会いました。

たよりが無い許仙——彼女の恋人を愛してしまいました；

彼は一人のお坊さんを信じでおり、一時的にぼうっとして、

鉢を持って、妻の正体を覆ってしまいました。

今日まですでに千年の時が経ちましたが、

かわいそうな事に彼女はまだ雷峰塔の下に押さえつけられています。

この無残な古い塔は、物寂しく、

莊嚴に、永遠に南屏山の晩鐘の中にそびえたっていることでしょう。

【劉海燕 訳】

十月一日

一昨日、潮見の専用列車に乗って斜橋へ行った。同行者に叔永²³、莎菲²⁴、経農²⁵、莎菲の先生のエリー²⁶がいた。叔永は汪精衛を僕に紹介した。1918年、南京の船²⁷で彼と一回会ったことがある。彼は本当に美男子で、可愛い！適之が言った、彼（汪精衛）がもし女だったらきっと一途に彼を愛するに違いないし、彼は男だけれど……やはり彼

を愛すると。

精衛の目は柔和で、不思議な光がある。ちょっと青みがかっていて、鋭く俠気がある。馬君武²⁸も僕たちのグループに加わった。斜橋に到着した時、適之らもすでに船の上にあった。彼と彼の従妹²⁹そして陶知行³⁰、全部で十人が、二艘そうの船に分かれて乗船した。途中、片方の船に集まって、御飯を食べた。十人が小さい船室にぎっしりつまって、いっばいで、腕を自由にかえることもできない。御飯のおかずは、大白肉³¹、粉皮³²、包頭魚³³、豆腐と青菜の煮物、ゆでたサトイモなどであった。皆で楽しく食べた。もち粟の香りを嗅いだ精衛は、非常に嬉しい様子であった。僕は曹女史のためにサトイモ³⁴を蒸してあげたら、みんな笑った。精衛は酒が強く、一人で白バラ酒をほとんど一本飲んでしまった。僕たちは道中詩について語りあった。精衛は旧詩を書く人だが、それに固執しているのではなく、彼がいうには新詩の好いところはよく知っているが、新詩が備えているべき新音節についてまだ悟るところがないので、まだ試みていないのだそうだ。僕と適之は陸志韋³⁵の『渡河』³⁶について、書評を書くことを約束した。

僕は元々彼らに夜の潮を觀せ、見たら船で硤石³⁷へ行つて、朝、錦霞館の羊肉麵³⁸を食べ、それから俞橋³⁹まで行って楓を見て、その上で一番列車に乗って南北に分かれるつもりだった。それが叔永夫妻がどうしても戻りたいというので、結局、半分は北へ、半分は南へ向かうことになり、僕は彼らに引張られて杭州へ行つた。

臨平⁴⁰を通る時、曹女史と一緒に、たそがれの中の山並み、黒いうろこ雲に見え隠れする一番星、西の空の縁の火の飾りのような赤い夕焼けを眺めた。

楼外楼⁴¹でカニを食べる、精衛の食べ方はずぶの素人！

湖心亭⁴²の畔で船を漕いで、月を觀る。

三潭印月⁴³、金木犀の香りを嗅ぐ。

十月四日

昨日、君勸⁴⁴、菊農⁴⁵たちと常州へ行つた。ついでに天寧寺⁴⁶を遊覧すると、正殿に百、二百人くらいの和尚たちが礼懺⁴⁷している。鐘の音、磬の音、鼓の音、佛の号の音、それらが合わさり、一種安らかで静かな、調和のとれているかのようになっていて、僕には異様なムードを感じさせた。正殿に入ると、非常に濃い芳しいジャクダンのにおいがする。青色の雲霧煙気がたちこめて、ずうっと三世仏の前まで昇っていった。また一種莊嚴で穏やかな、静かで落ち着いた境地である。

十月五日

君勸のところにかニを食べに行き、帰る途中で二冊面白い古本を買った。一つはマーク・トウェインの『シェイクスピアは死んだか？』、もうひとつは、シドニー・ラニエ⁴⁸の『音楽と詩』。古ぼけているけれど全部初版本だから、めったに手に入らない。朝裕卿〔不詳〕と一緒に呉淞⁴⁹へ行つて君革〔不詳〕を弔つたのだが、彼が現れたとの

奇跡を聞いて、今日是人に会う度にその話をし、手紙で両親にも教えた。これは本当に驚くべき奇跡だ。もしかして最も下等なレベルの迷信には根拠があるのだろうか？

紙の衣服、紙の金、経懺⁵⁰、寿限⁵¹……これらの話は非常に漠然としている。僕は君革の母親と約束した、彼の靈魂が帰ってきたら、僕は彼に会いに来ますと。君勤もどうなっているのかを見に行きたいそうだ。

今日は、振飛⁵²と一枝香⁵³で御飯を食べた。フランス文学に関する話が弾む。振飛は本当に“風雅な商売人”である。

十月九日

一昨日、常州駅で陸橋に上がると、西の空は僕が最も好きな薄青色と浅黄色とを合わせた色に染められて、一粒あかあかときらめく一番星が雲の中からはい上がってきた。僕は思わず大きな声で、「いい景色だなあ」と叫んだ。菊農は言う“寡人疾有り、寡人貨を好む。”⁵⁴確かに僕は色を好む。最初はどこかに無理があつて、現在は良く見えるようになった。観賞も自然となった。今夜、光が目につかったので、一枚の赤いMG紙でランプを包んだら、明かりがかなり静かに落ちて来て来た。その薄赤い明かりの下で、火をつけた煙草の吸い込む時の光は、とても艶っぽい青い光を一筋発し、まるで磷のようである。

【徐青 訳】

十月十一日

さっき美麗川⁵⁵から戻ってきた。今夜は叔永夫婦のおごりで、席には適之、経農、擘黄⁵⁶、雲五⁵⁷、夢旦⁵⁸、君武、振飛。精衛は来なかったが、君勤が途中で飛び入り参加した。君勤は莎菲に初めて会って、彼女に非常に傾倒し、あとで彼女と散歩しながら感極まり、「内心の生活」⁵⁹がある人と褒め称えたので、適之はたまらず爆笑した。君武は精衛が政治に関わっていることを大いに責め立て、絶対ダメになってしまうと心配していた。

昼ごろ東蓀⁶⁰が君勤のところを借りて客を呼んだ。適之、菊農や筑山⁶¹等がいた。菊農と芝生の上に仰向けになり、ペイター⁶²の「ルネサンス 美術と詩の研究」⁶³やハーディ⁶⁴の詩を読んだ。

午後適之に滄洲別荘へ雑談に引っぱって行かれた。彼の煙霞雑詩を読んで、まだ隠して教えてくれないものがあるのかと尋ねたところ、適之は恥ずかしげにあると言ったが、発表しようとは思わない、差支えがあるからと言う。『努力』⁶⁵の出版停止はもう決まり、改組するつもりだ。大体『新青年』⁶⁶を復刊したようなものになるだろう。なぜかというと、仲甫⁶⁷がまた仲間を引っ張り込もうとしているからだ。古い仲間がばらばらになって再び集まるのもまた良しだ。適之はこの「冒険」について僕の意見を聞いた。自分でお金を算段できると言っていたが、夢のようなものだろう。

秋白⁶⁸も来た。彼の肺にある病気が確認されたものの、朝から夜まで働かねばならない

なんて、かわいそうだ。適之が沫若⁶⁹の新しく作った短い詩をばらばら見せてくれたが、叙述、構成、言葉の風采、すべてにおいて枯渇が見える。「女神」は終にご臨終あそばしたのだろうか。

適之、経農と一緒に歩いて民厚里 121 号に沫若を尋ねに行った。探し当てるのに骨が折れた。沫若自らドアを開けてくれた。乳飲み児を抱いて、素足に学生服姿で、かなりやつれていた。でも広い額と顎が、本人である証だった。入っていくと先客がいた、中に田漢⁷⁰がいて、やはり小さな子を抱いて、間もなくドアを出て行った。顔が長いという印象だけが残っている。沫若の家はひどく狭く、調度品も雑然として、その間に子どもたちが入り乱れ、転べば父親に慰めてもらい、涙や鼻汁を拭かねばならないのもまた父親で、中国語はしゃべれない。台所からカランコロン⁷¹と下駄の音が聞こえたのは、日本人の奥さん⁷²であろう。座って挨拶を交わし、仿吾⁷³も階段を下りていってしまうと、会話が途切れ、適之が頑張って会話になる種を探したが、主人と客の間は氷が張ったように、しばらくしても溶けなかった。沫若は時々笑みを浮かべたが、何を考えているのか分からなかった。経農は黙って一言も言わなかったが、何とも言いようがなかっただろう。五時半に別れを告げて出てきた。適之もこの気詰まりな会見に相当驚いていた。前回達夫⁷⁴がいた時は、家も少し綺麗で、会話も比較的スムーズだったのだそう。でも、四人の手で日刊一つ、月刊一つと季刊一つ⁷⁵を維持するのはそうそう愉快なことではなからう。生計の余裕もなく、或いは困窮していれば、狂叛自居〔不詳〕も無理はない。

十月十二日

先ほど沫若が長男を連れて会いにきてくれた。今日は会話が昨日よりよっぽどスムーズだった。彼は西滢⁷⁶に「みずうみ」⁷⁷の評論の件で手紙を書いたそうだ。おかしなことに、彼が言うには西滢が志摩そのものだと疑っている人がいるらしい。筆致がそっくりなのだという。面白い！ひょっとして僕たちイギリス留学生のアクセントは人と違うところがあるのだろうか、そうでなければ、なぜたくさんの方が僕たちを同一人物だと誤解するのだろうか。来年沫若は四川赤十字病院に行くそうだ、上海が嫌いだからでもある。「卷耳集」⁷⁸を一冊もらった。彼が「詩経」を新しく訳したものだ。意図は良い、序に自負の言葉が書いてある。「……孔夫子が生まれ変わってきても、「わしを啓発してくれるのは沫若である」⁷⁹と言ってくれるに違いない。」と。まだ飛ばし読みしかしていない。

沫若が部屋に入ってきたとき、僕は詩作の最中だった。彼が帰った後、今しがたやっと完成した。詩の最後の言葉をタイトルにした——「灰色の人生」⁸⁰。「問樵〔不詳〕」を何章も読んでみたら、かなり体得できたような気がする。

譚裕〔不詳〕と一緒に樓の窓に寄りかかって街を眺めた。彼は向かいの店舗の裏話が

一つ一つ聞かせてくれて、僕は深い感銘を受けた。卑劣な、罪深い人道は、人道とは言えないのではなからうか。

十月十三日

昨日この日記を書いたあと、適之のところに行って長話をした。6時から12時まであまり休まなかった。帰り道慕尔鸣路⁸¹を過ぎたとき、銭湯帰りの君勤、菊農らに襲われて、部屋へ連れ込まれてしまった。結局帰らせてもらえず、ソファーの上で一夜を我慢せざるを得なかった。頭も足も真っ直ぐに伸ばせなくて苦しかったうえ、巨大な蚊にも攻められ、あまり寝られなかった。

適之とあれこれしゃべった。本や詩や友情や愛や恋や人生……夜が明けるのも気付かなかった。適之は確実に若返ってきた。いいことだ！

適之の詩で前に序後ろに跋があるものは全部あやしい。将来は全部本伝の索引資料になる。 【劉斯微 訳】

十月十五日 帰国一周年記念

今日は僕の帰国周年の記念日だ。ちょうど冠〔不詳〕から手紙がきた。一通の六枚の長い手紙。なんと得難く、貴重な記念品であろうか。去年の十月十五日、そろそろ日が暮れようとする頃、僕は三島丸船から望遠鏡で船の停泊場所の迎えに来ている人々を眺めていた。しだいにこの親戚、あの友人、及び別れて五年経ち、多少老けたような最愛の父親を見つけた。その時僕の激しく高鳴る胸の中に、突然悲しみなのか喜びなのか見分けることのできない寒流が迸ってきて、頬に二筋の急流のような熱涙が流れるのを感じた。その後、三泰棧に戻ると、みすみす五年間引き離された僕の可愛そうな母は、ただ二筋の熱涙だけで、彼女の不孝の甘やかされた息子を迎えた。しかし久しく別れていた後の再会の悲しい感覚は、あくまで一時のもので、長い間別れていた後に再会した時の喜びは、ついに実現された。その時祖母の相変わらずの元気そうな姿に、僕は少なからず慰められたが、母の方は本当に年をとった感じだった。

今年の十月十五日——今日という日はどうだろう。祖母はすでに天の仙人となり、愛する孫の命の一切をもう自分の目で見ることにはできない——今日は祖母がこの世を去ってからすでに第四十九日目だ。これは埋めようもない欠陥で、心に居座った悲しみである。僕の最愛の母、その一生は苦痛と悩みと、不愉快ばかりだ。以前はまだ僕が学業を終えたら、彼女に慰めを与えてくれるだろうと期待していたが、今では病気が重くなり、苦悩も激しくなり、心配はますます増えるばかりだ。僕は母の憂いの源を取り除くこともできないし、彼女のそば近くに仕えていくばくかの慰めを与えることもできない。父親も同じく失望している。僕は父親の悩みを少しでも肩代わりすることができないばかりか、かえって白髪を無数に増やしてしまった。僕は天と地の間にあって、何と罪を負ったうしろめたい人間なのだろうか。

一年、三百六十と五日が、むぎむぎと過ぎてしまった。僕の本来の快活な性質と容姿も、これによって「年齢」の痕跡を永遠に受けた——これもまた埋めようもない欠陥で、心に居座った悲しみである。

僕の最も尊敬し最も愛する友人よ、僕はただ一人で思索し、一人で想像し、一人で時が残した痕跡をなで、一人で内心のひそかな苦しみを覚え、一人嘆息し、一人涙を流すことしかできない。……さきほど僕は君からの手紙を読んで、満ち潮のような感慨が、胸の内をふさぎ、たまらず睨り泣いてしまった。僕はただの乞食だ。人道と同情の固く閉ざされた扉を軽くたたきながら、ドアの向こうの人にはもしかすると同情心があり、便宜をはかってくれるかもしれないと妄想している。——しかし扉の外で長い間立っていても、中の物音は聞こえず、扉の外の強くて冷たい風が、僕のぼろぼろの身体に向かって激しく吹き付ける——僕はとても寒いよ、大扉の中の慈悲深い人々よ。

一昨日郭沫若に美麗川で奢ってもらった。楼石庵⁸²がちょうど南京から来たので、彼も列席した。飲んだ人はみな酔った。胡適の誠意ある言葉に、沫若は急に彼を抱きしめてキスをした。——しまいには拳が出て罵りつつ、分かれた。——美麗川を罵ったのだ。

今晚胡適と答礼の宴席を設けた。田漢夫婦と叔永夫婦、そして振飛が居た。神話について大いに話し合った。出かけた時、腴廬に会った。——振飛は彼の姉妹⁸³が「上海の社交界の花」だと言っていた。

十月十六日

昨夜宴会の後、また胡適と亜東書局に行き、しばらく座っていると、階上へ上がってきた人がいる。黄色のスーツに毛糸の縞のベストで、すたすた歩き、帽子のつばが下に巻き込まれている。——実に「三流探偵」といった風体であったが、胡適が立ちあがって仲甫だと紹介してくれた。彼が僕の向かい側に座ったので、僕は彼の容貌をじっくり見た。髪の毛の生え際が後退して、ほとんど頭の天辺にある。額は坂のようで、とりわけ他人と異なるのは彼の鼻筋が太く通っていることで、眉はくっきりしている。近代の表現派がアフリカの芸術を模倣して彫った銅像のような面相だ。

胡適と[K・]マンスフィールドの作品をいくつか翻訳することを約束した⁸⁴。西澄にも協力を求めて、泰東書局から出版してもらおう。胡適は五千冊売れることを望んだ。

ダウデン⁸⁵の『ブラウニング伝』を読んだ、僕は彼ら夫婦の恋愛話の高潔さが大好きだ。エリザベス⁸⁶はロバートより六つ年上で、彼らの文通の中のある文は驚きと、豊かさと、愚かさと、味わい深さの極致だ。

仮に君の善が過去も現在も僕の善に対する理想だとしても、僕はいままで君を通じて、或いは君の助けを借りて、或いは君自身から幸せを得ようと思ったことはない。僕を君にこんなに近づいているから、君はもう僕を見ることができない。……

僕はかつて気持ちが落ち着かなくて、君に僕を見せるべきだと思っていた。だが、愛情は見えるよりさらによい。僕はあまりにも君の愛を愛しすぎている。恋人よ、これが僕の君に対する愛の中に探し出すことのできる最大の欠点だ。⁸⁷

明宣のこと——あの子は撫堂先生〔不詳〕の末の娘で、今年九歳、非常に聡明で可愛い。僕は膝の上に抱き上げて、詩を唱えて楽しませてやった。 【王艷珍 訳】

十月十七日

振鐸⁸⁸が少し立ち寄った。ハネムーンは実際三日間だけで、また陸志韋にいわれる「僕僕として公に従う」〔出典不詳〕と知らさなければならない。

幼儀⁸⁹が手紙を寄越した。帰国したら幼稚園を設立したい、まず硤石から着手したいという。

昼間は出かけず、五時に小さな蟹を三つ食べた。食後樹屏たちと雑談したが、しまいには不愉快になった。

急に阿雲を思った。あの明るい瞳だけが僕の憂いを解いてくれると思ったので、天吉里〔不詳〕へいった。涓孫が家にいたが、阿雲は見当たらず、おかしいと思ってたずねると、もう田おじさん〔不詳〕について紹興へ行ってしまったそうだ。

僕は阿雲が大好きだが、今は小友だけを愛する、今は宝宝^{補注2}の二、三、四、爺は皆おそらく僕を忘れてしまっただろう。

十月二十一日

昨日の午後硤石からここに着いた。適之、経農とともに新新旅館に泊まった。今回の旅は“仕事”でもあり、“楽しみ”をたずねるためでもある。

昨日の汽車で、小瀧〔不詳〕が書いた「龍女」を読み、大いに想像をかきたてられた。経農はついさっきまた、日がたつのが早すぎると言ったので、僕は日がたつのは遅すぎるよといった。本を読むように、つまらない頁があれば飛ばしてしまえばよい——しかしいつになったらつまらない頁に行き着くのだろう？

僕たちは一日目に湖へ行って湖心亭を遊びまわった。——湖心亭での夕焼けと湖の眺めは湖上であまり注目されない逸品だ——花をつけた芦荻を見て、楼外楼で蟹を食べ、曹女史が柳のこずえの月を見たいというので、僕たちはテーブルを窓のそばに移した、これぞ「蟹を待ちて月を見る」というものだ。夕陽の中の湖心亭は、麗しい。月光の下の湖心亭は、さらに麗しい。夕焼けに照らされて芦の穂は銀色。月下の芦の穂は銀色。モーパッサンに「In the Moonlight [La Chanson du rayon de lune]」という作品がある。昼間に適之が見せてくれたが、月光の人を動かす悩ましい魔力を描いていて、登場する牧師は、いつまでもこんな矛盾に悩み続けている。「神は闇夜を作ってわれわれを安眠させているからには、この絶頂の美しい月光、昼間よりもずっと美しいのに、何の意

味を持つのだろうか。」すなわち最もまじめで、最も頑固な恋人であっても、彼が硬い屍でなければ、恐らく、「秋の月のような銀の指先が、ロマンティックにもがく」ようなことは耐えられないだろう。曹女史は「秋香」の歌を歌い、とても心地よい声であった。

三潭印月——僕たちは九曲とやらは好きでなく、三樹とやらも好きではない、僕は月光の元で雷峰塔の極めて静かな影を見るのが好きだ——僕はそれを見たら、もう命はいらない。

阮公墩^{補注1}も逸品だ。夏と秋の間は緑深いオアシスとなり、夜には深いもやが立ちこめる中、背景の山々は輪郭だけを残し、それと湖心亭は一对の乳房の形をした濃い緑——群青となり、遠くから見ると高木か灌木か分からず、楡の蔭か柳の蔭かも分からない、ただ二かたまりの妙なる青い島——そこに神仙の住まいがないと誰が言えようか。

冬の西山を形容するには「鈍」という字がよかろう。中秋の西湖を形容するには、「嫩」の字をはずせない。

夕べ十時ごろ適之と一緒に静偃の湖と堤と波に映る堤の影を遠目に眺めていると、あまりに清らかで秀麗で妖艶で、実に理想的な美人がどのように姿態が優雅であっても、くらぶべくもない絶世の美しさで、僕たちは船に乗って月を愛でようと出かけた。秋の葉のように軽い船に乗り、静かに夜の湖の柔らかい胸にこっそりと滑りこみ、芦の茎のような軽い櫂で、ひそやかに彼女の輝き、しっとりとした美しい顔をたたいた。霧の殻のようなその夢の殻を突き破り、忍び寄った。見てみたかったのだ、彼女の月光に酔いつぶれた妙なる風情を。

しかし昨夜はタゴールの件で忙殺され、月の光を裏切り、湖の光を裏切り、舟を取りにもいかず、西子の夢をこっそり味わいにもいかなかった。今夜の月の出を待つとしよう。

【金靄ト 訳】

“数が多いこと”はまさしく美である。エメラルドグリーン of 山の斜面の前に数千匹の綿羊が雪の様な塊になって近づいてくる、これは美しい。満天の無数の星、千万個のほんのりと明るい光、限りない青空を通して見下ろす大地、これも美しい。泰山の頂上付近の雲海、多くの雲の峰が朝日の光の中に静まり返っているのも美しい、アイルランドのあの“羽化島”に生息する数千羽の鳥が、夕日が西に沈むときには“羽化”した大空が見えるばかりで、ただ多くの鳥が一斉に大声で鳴いている、これも美しい、……数が多きことは正しく美しい。数が多くなると、まるで一種の自然律に照らして、自然に特別な配列と、特別なリズムと、特殊な型を持ち得る様で、僕たちの審美的本能を突き動かし、僕たちの審美的な情緒を呼び覚ます。

それ故西溪の葦荻と花畑の竹林は、数の多さによる美にはかならない。知能で分析できるものではなく、少なくとも僕の知能で分析できるものではない。葦の花を見るとき、トウモロコシの熟する頃の麦の田を見る時、或いは高いところから松林の頂を見る時、

どの場合も似ている。しかし色の違い、即ち白と黄と青の違いによって、僕たちが風景に対して持つ感情はそれぞれ異なる。季節は当然感情に影響する要素だ。とりわけ葦の花は運勢の移り変わりを代表する、一年中で最も顕著で最も感動的な移り変わり：中秋と晩秋に象徴される万物の繁栄から衰退への測り難い意味：従って葦と荻は天性の詩題である。

西溪の葦は数年来すでに減る傾向にあり、葦の畑の所有者の農民は、葦の薪としての利益は桑の葉に遠く及ばないから、桑の木に植えかえてしまったので、あと数年経ったら、ひょっとして西溪の“秋雪”は、なんと“蘇堤の断橋”と共に、同じく過去の名残となってしまうかもしれない！

昼間の日光の中で葦の花を見ると、葦の花の優れた趣を見ることが出来ない。葦の花はライラックや海堂と同じ様に、月光の下でのみ魂の秘密を漏らしてくれる。それから夕日の風の中でも。去年の十一月に僕は南京で玄武湖⁹⁰の葦荻を見た。その時柳の葉は既に枯れ、葦の花は半ば散っていたが、紫金山⁹¹の反射する夕映えと城壁の上にわき起こった寒風は、葦の繁みの無数の鴨を驚かせ、インクの点のように鴨たちは雲空にまき散らされ（下界の鳴き声と相和して）湖一面に飛ぶ柳絮とともに、酔いつぶれたように舞い、一種の物悲しい気分を、ある種の人の心を打つ情緒を描き出している、僕はこれを“秋の魂”と呼ぶことしかできない、言葉では言い尽くせない“秋の魂”。また葦の花を見た経験は月夜の大明湖⁹²で、僕が徽のために書いた“月の光と湖（英文）”は、あの得難いチャンスを記念したものだ。

それだから一昨日西溪の葦の畑、畑自身はそんなに僕の感情を高ぶらせなかった。白昼西溪の葦の花を見ることは、月夜に舟を浮かべて湖心亭へ行き葦の花を見るのに及ばない、近くて便利であり、ずっと経済的だ。花畑の竹は、絶景と言うべきで、素晴らしすぎて、僕は褒めるに相応しい言葉が出てこない。竹ばかりでなく一帯の風景もみな良く、中秋の後は特に素晴らしい。道中黄柳、紅葉は応対に暇が無いほどである！三十一日の晩僕たちは葛岭⁹³に登り、その頂上の初陽台に真っ直ぐに登ると、折り返し点は香山にそっくりだった。

二十三日

昨日は適之の記念日であったので、僕たちは午後三人で壺春陵⁹⁴に出かけ、門の外の道端にテーブルを並べて酒を飲んだ。胡適の面した西山は、夕日が湖の波の上に残影をとどめ、一本の長い金鎖のように、山の後ろにゆっくりと消えていく琥珀色の影を落していた。経農は真中に座っていたから、両側を見られるだろうと思っていたが、或いは彼は片方しか見えなかったかもしれない。僕の位置は東の方、夕焼けの中しだいに白く光りながら明月が昇っていく方に面していて、銀色に輝く湖面は、恰も夫人の衣きぬずれを聞くかのようで、一瞬息が乱れ、心は高鳴った。城南電灯工場の煙は、そのとき風にした

なびいて、まっすぐ北高峰の方へ吹き流され、空中で一匹の真っ黒な大蛇のように、半ば波の光を隠してしまい、益々月の光の純粹さを引き立たせる。その時ゆっくりと月光の下を通して来た一艘の異様な船は、たぶんレンガを積む船だろう、長く、平底型であり、船倉は無く、又日除けのテントも無く、静かに月光の中をやって来た、船先には一人の人影が立っており、手には長い竿を持っている、舟を左右に推し進め、銀の波の上を、ゆっくりとやって来た。一幅の精緻巧妙な“雪羅靄”〔不詳〕は金の波が広々と漂う中にはめ込まれひそやかに、ひそやかに過ぎてゆく。神は賛美を受け入れるべきではないか。僕は気違いになったように酔った、酔った！

食後、僕たちは湖心亭に行つて湖畔の敷石の上に横たわり、世の中の不満について論じた、僕は大いに怒りに燃え、叫び、呪い、地団太を踏んだ。皆は不満を漏らした。其の後独りで舟を漕ぎ、湖心亭を一周した。オールが波を切るのを聞き、風が葦の葉を鳴らすのを聞いて、不承不承怒りの炎を押さえつけた。

【丹羽一郎 訳】

二十八日午後八時

滞在はおしまい、この西湖日記も終わりだ。経農はもう帰った、今日の早朝帰つたのだが、もう行ってしまつて数百年も経つたようだ。適之は明後日上海へ戻ると決めており、僕は明日か、遅くとも明後日の早朝には行こうと思う。先ほど僕たち三人は杏花村でご飯と蟹を食べ、僕は酒を何杯か飲んだ。冬筍が本当に美味かった。

空いっぱい星々、僕は船に寝転んで星を見る。深い深い宇宙で、僕たちの生命は一体どんな価値があるのだろうか。僕はまた自分の傷跡を探り当てた。星の光よ、どうかお慈悲を、そんなに鋭い眼を見開いて、僕の悲しみをいや増さないでほしい。〔K・〕マンフィールドも少なからず翻訳した。「パーカー女史の生涯」はもう訳し終わって、まずまずの出来だと思う。「園遊会」は半分しか訳していない。

十一月九日

昨日観〔不詳〕に会いに行つて、思う存分深い話をし、忘れられないひと時となった。

主要参考文献（編著者アイウエオ読み順。注に個別に挙げたものを除く）

- 愛知大学編『中日大辞典』（大修館書店、1996）
内野熊一郎「梁惠王章句下」『新釈漢文大系4 孟子』（明治書院、1967）
郭宛『魂と肉の間——胡適的情愛苦旅』（四川文芸出版社、1995）
韓石山『徐志摩と陸小曼』（团结出版社 2004）
金宏達他編『張愛玲文集』（安徽文芸出版社、1991）
邵華強他編『徐志摩選集』（人民文学出版社、1990）
徐志摩著、陸曼編『一本没有顔色の書』（上海遠東出版社、2005）

- 徐立明『從西湖記及愛眉小札看徐志摩的愛情史』
曹聚仁『上海春秋』(生活・読書・新知三聯書店出版、2007)
曹伯言・季維龍編著『胡適年譜』(安徽教育出版社、1986)
趙遐秋『徐志摩伝』(中国人民大学出版社、1989)
趙遐秋他編『徐志摩全集 第5巻 書信・日記集』(広西民族出版社、1991)
耿雲志『胡適及其友人』(商務印書館、1999)
凡尼／曉春『徐志摩：人和詩』(広西師範大学出版社2005)
羅竹風主編『漢語大辞典①③⑦⑨』(漢語大詞典出版社、1995)
李盛平主編『中国近現代人名大辞典』(中国国際広播出版社、1989)

注

- 1 西湖(せいこ)は、中国浙江省杭州市にある湖。杭州市西郊にあることから西湖と呼ばれている。
- 2 翻訳担当順。それぞれ担当個所の末尾に担当者名を示した。所属はいずれも名古屋大学、所属研究科及び学年は次の通り。高媛：国際言語文化研究科 M2。劉海燕：国際言語文化研究科 D3。徐青：国際開発研究科 D3。劉斯微：国際開発研究科 M1。王艷珍：国際言語文化研究科 D2。金靄卜：文学研究科 M2。丹羽一郎：国際言語文化研究科 M1。
- 3 「丫」：旧時の女中；「姑太太」：嫁いで行った娘に対する里方で「姑奶奶」という称呼であり、かなりの年配に達すると「姑太太」と呼ばれる。
この文脈では、「年は若いが、世代から言う和高い人」と解釈され、日本語の「若い大おばさん」というニュアンスに近いと思われる。
- 4 「歳半」は浙江省の方言で、一歳半の意味である。
- 5 孤児または捨てられた嬰兒を引き取って養育する所。
- 6 人が亡くなってから、魂が帰ってくるとして儀式を行う日のことだと思われる。
- 7 本稿訳者の間では、「風水を指す」と解釈する者が多かった。
- 8 漢方医の言い方。漢方医の理論によって、細菌やウイルスの感染、風を引く、血管が詰まる、疲労などで引き起こす病気のこと。
- 9 風水の用語であろうか、不明。
- 10 胡適(1891-1962)、安徽省績溪の人。字は適之。1910~14年渡米し、コロンビア大学で哲学を専攻。1916年文学改革を提唱し、白話文学運動の代表的な人物になる。北京大学教授を経て政界に転じ、建国後は台湾へ渡った。
- 11 妣：亡き母。
- 12 沈叔薇のこと。徐志摩の従兄であり、小学校から中学校まで同窓生だった。
- 13 原文「糯淨」。不明だが、二字それぞれの意味から、柔らかくて綺麗であるというニュアンスを取る。
- 14 徐志摩の従兄、徐絳義(永和)のこと。(「徐氏世系表」陳從周編『徐志摩年譜』上海書店1981、p.2)
- 15 焼酎にバラの花を入れて浸出させ氷砂糖を加えたやや甘い香りのよい酒のこと。
- 16 原文「吐納」。「吐故納新」の「道家の養生の術。悪い気を吐き出し、清い気を吸い込むこと」(漢和大辞典、第三巻、八五頁)の意味にとる。

- 17 不明。ここでは取立ての菱を指すと解釈する。
- 18 不明だが、注14「絳義」の兄弟の可能性が高い。
- 19 烟霞洞のこと。昆崙山の西北側、龍泉鎮東殿後村から1.5キロ離れた烟霞山にある。
- 20 逆三角形の顔で細長い目をしており、泥棒をイメージさせる顔つきの人。ここでは、人のあだ名である。
- 21 「蛮子」は仲堅という人のあだ名だと思われる。仲堅の身分は不明。
- 22 康有為のこと。1858 - 1927 広東省南海の人。号多数。1913年孔教会会長に任ぜられて以降、時の人に「康聖人」と風刺された。弟子に梁啓超。1898年百日維新を促す。変法失敗後、日本に逃亡、上海に戻り、1917年清帝の復活に失敗。青島で病没。
- 23 任鴻雋(1886 - 1961)字は叔永。四川省巴県の人。科学者、教育家。(李1989、144頁)。胡適とは米国留学時代からの友人。
- 24 陳衡哲(1890 - 1976)原名は燕、号は莎菲。江蘇省武進の人。米国に留学、北京大学の初の女性教授、小説家。任鴻雋の妻、胡適の旧友の一人(李盛平1989、420頁)。
- 25 朱經農(1887 - 1951)江蘇省宝山の人。中国現代の著名な教育家、文学者。校長、教育行政の重職を歴任した。(李盛英、1989、135頁)。
- 26 底本は「Ellery」を「則ち胡也頻」と注を付けているが、徐志摩日記に添えられていた写真及びメモによれば、西洋人女性「Miss Ellery」(不詳)のこと(徐志摩2005、pp.47-48)。
- 27 1918年8月14日、徐志摩が上海より南京丸に乗って米国留学した際のことを指す。
- 28 馬君武(1881 - 1940)湖北省蒲圻県の人。ドイツに留学、工学博士。中国民主革命時期の学者、政治活動家、教育家。(李盛英1989、16 - 17頁)。
- 29 胡適の従妹の曹佩声(1902 - 1973)。原名麗娟、学名誠英。胡適の三番目の兄の妻の妹。1923年当時、胡適はすでに親の決めた相手と結婚していたが、曹佩声と恋愛関係に陥り、療養の名目で煙霞洞にて彼女と滞在した。(郭宛1995、202 - 258頁)
- 30 陶行知(1891 - 1946)安徽歙県生まれ。原名は陶文濬、陶知行と名乗る。教育家。(李盛平1989、604頁)。
- 31 豚肉をかたまりのまま白湯で茹でてから薄切りにしたもの。醤油・味噌などをつけて食べる。
- 32 ひもかわ状の春雨。緑豆またはサツマイモなどの澱粉でつくり、薄く平たくのばした食品。
- 33 コイ科淡水魚で、主要な食用魚。「粉皮包頭魚」は、ひもかわ状の春雨と包頭魚の煮物を指す(愛知大学1996、1140頁)
- 34 「大芋頭」とはサトイモの通称、方言としてサツマイモを指す場合もある。
- 35 陸志韋(1894 - 1970)、浙江吳興生まれ。心理学者、言語学者、音韻学者。中国心理学会会長(李盛平1989:383頁)。
- 36 『渡河』は新詩集で、1923年亜東図書館出版。
- 37 硤石鎮は徐志摩の故郷で、浙江省海寧市にある。
- 38 現在の海寧市硤石工人路69号にある飲服公司錦霞館。硤石は湖羊の著名な産地で、「酥羊大面」は名物料理。
- 39 杭州西湖にある橋の名前。
- 40 杭州余杭にある臨平山。“東来第一山”という称がある。
- 41 1848年創業。杭州を代表する老舗のレストラン。カニ料理が特に有名。張愛玲のエッセイ「談吃與画充飢」にも見える『張愛玲文集 第四卷』所収)。

- 42 杭州・西湖のなかにある小島に建てられた「湖心亭」をさす。
- 43 西湖に浮かぶ3つの島の1つで「三潭映月」とも呼ばれている。この石灯籠は有名で、中国の1元紙幣の裏にも見える。
- 44 張君勱(1887 - 1969)、原名嘉森、字士林。江蘇宝山の人。近現代の学者、早期新儒家の代表の一人。徐志摩の最初の妻張幼儀の兄(李1989:363を参照)、すなわち徐志摩の義兄の一人。
- 45 瞿世英(1900 - 1976)字菊農、ペンネーム菊農、江蘇常州生まれ。中国近現代の教育家。五四運動の時、北京学生連合会代表(李1989:752を参照)。
- 46 中国江蘇常州市の中心部、唐代貞観、永徽年間(627 - 655)に建立。1983年中国重点仏教寺院の一つとされた。
- 47 仏教用語。仏菩薩を礼拝して、経文を読み、罪を懺悔すること。拜懺ともいう(羅竹風⑦1995、966頁)。
- 48 Sydney Lanier、アメリカの詩人。
- 49 上海は、もともと江蘇省所轄呉淞県であったが、1928年蔣介石の大上海計画によって、「上海特別市」に編入された。
- 50 佛教の経文と懺悔文を指す(羅⑨1995:870頁)。
- 51 壽数ともいう。壽命の限度を指す。
- 52 徐新六(1890 - 1938)字振飛。浙江余杭の人。英、仏留学。帰国後、北京大学で教鞭をとるとともに経済界で活躍、上海租界の金融事業を牛耳る。1938年8月24日、彼の乗る飛行機は日本軍により撃墜された(李盛平1989、575頁)。
- 53 西藏路上にあった「一枝香」は西洋料理では最も有名なレストラン(上海徐氏兄弟創設)。1994年壊され、現在は小木橋路斜土路附近にある。(曹2007:321 - 322頁)。
- 54 中国語原文:王曰、寡人有疾、寡人好货。对曰、昔者公刘好货。诗云、乃积乃仓。乃裹餼粮、于囊于囊。思戢用光。弓矢斯张、干戈戚扬。爰方启行。故居者有积仓、行者有裹粮也。然后可以爰方启行。王如好货、与百姓同之、于王何有。王曰、寡人有疾、寡人好色。对曰、昔者大王好色、爱厥妃。诗云、古公亶父、来朝走马、率西水浒、至于岐下、爰及姜女、聿来胥宇。当是时也、内无怨女、外无旷夫。王如好色、与百姓同之、于王何有。(内野1967:61 - 62頁)。
- 55 上海の西四馬路にある「美麗川菜館」というレストラン。当時有名人の集まる場所としてよく使われた。
- 56 唐钺(1891 - 1987):字肇黄、元の名を柏丸といい、福建閩侯生まれ。心理学者、翻訳家。
- 57 王雲五(1888 - 1979):字岫廬、広東香山生まれ。19歳で英語の教師になり、胡適が教え子であった。1921年に胡適の推薦で商務印書館に入り、1930年に総経理になった。商務印書館の発展と中国の図書分類に大きく貢献した。
- 58 高夢旦(1870 - 1936):名は鳳謙、字は夢旦、福建龍門郷生まれ。梁啓超とは親しい友人。1903年に商務印書館に入り、あとで編訳所所長になった。「四角号码检字法」に大きく貢献した。
- 59 張君勱が1923年に「人生観」(『清華周刊』第272期)で提唱した精神。
- 60 張東蓀(1886.12 - 1973.6)浙江省錢塘県生まれ。哲学者、政治家、ジャーナリスト。
- 61 不明。
- 62 斐德:ウォルター・ペイター(Walter Pater 1839 - 1894)イギリスの評論家、小説家。
- 63 *The Renaissance: Studies in Art and Poetry*. London: Macmillan, 1917.と思われる。
- 64 トマス・ハーディ(Thomas Hardy1840-1928)イギリスの作家、詩人。

- 65 『努力周報』のこと。1922年5月7日北京で胡適が創刊。1923年10月31日に終刊。
- 66 1915年9月15日陳独秀が上海で創刊。胡適も編集者の一人であった。1922年7月に終刊。
- 67 陳独秀（1880 - 1942）のこと。字は仲甫、安徽省懷寧に生まれる。1915年『青年雜誌』（第二卷から『新青年』に改称）を創刊、所謂新文化運動を發動する。
- 68 瞿秋白（1899~1935）革命家、文学者。駐コミンテルン中共代表などを務め、1935年国民党軍に逮捕され刑死。
- 69 郭沫若（1892 - 1978）、中国の政治家、文学者、歴史家。沫若は号。四川省樂山県の人。日本の九州大学医学部卒。文学団体「創造社」の旗手として知られる。はじめ国民党に参画、次に中国共産党に入党。
- 70 田漢（1898 - 1968）は、湖南省長沙の人、本名は田寿昌。著名な劇作家であり、中国革命劇運動の基礎を築くとともに、戯曲改革運動の草分け的存在。
- 71 原文「卓卓」。ここでは下駄の音を形容しているため、「カランコロン」とする。
- 72 郭沫若は実家の四川で結婚したことがあるが、日本留学に行った後、看護婦である佐藤富子と出会い、1916年から同棲し始めた。1917年に長男の郭和夫、1920年次男の郭博、1923年に三男の郭仏生が生まれた。（龔繼民・方仁念編『郭沫若年譜』上巻 天津人民出版社、1987）。
- 73 成仿吾（1897 - 1984）湖南省生まれ。革命家、文学者、翻訳家。
- 74 郁達夫（1896 - 1945）中国の小説家。日本留学中に郭沫若らと創造社を結成し、ロマン派文学を提唱。鬱屈する情感を吐露した私小説を書いた。第二次大戦終戦時、スマトラ島で日本憲兵に殺害された。
- 75 1923年7月21日創刊『創造日』、22年5月創刊『創造』季刊、23年5月13日創刊の月刊『創造周報』。
- 76 陳源（1896 - 1970）字通伯、筆名西滢、江蘇省無錫の人。文芸評論家、後に文化官僚。1912~22年イギリス留学中に徐志摩と知り合う。当時は北京大学教授。
- 77 「みずうみ」（Immensee）ドイツの作家 Theodor Storm（1817 - 1888）の小説。郭沫若はこの小説を翻訳したことがあり、陳西滢がその翻訳について評論した。（清水賢一郎「明治の『みずうみ』、民国の『茵夢湖』 - 日中両国におけるシュトルムの受容」日本中国学会報 1992、vol.44、233-224頁。）
- 78 郭沫若が1923年8月に上海泰東図書局を通じて出版した本。
- 79 出典：「論語」「子夏問曰：“‘巧笑倩兮，美目盼兮，素以为绚兮’ 何謂也？” 子曰：“绘事后素。” 曰：“礼后乎？” 子曰：“‘启予者商也，始可与言《诗》也。’”
- 80 詩「灰色的人生」は、1923年10月21日『努力周報』第75期に発表、1925『志摩的詩』（中華書局）に収録。
- 81 上海にある道路名。1917年に外国人の名前より「慕尔鳴路」と名付けられた。
- 82 賀昌群（1903~1978）の『魏晋清談思想初論』における序の中に、樓石庵という名前が見えるが、経歴不祥。
- 83 唐瑛、唐薇紅の姉妹を指す。
- 84 徐志摩は1924年、陳西滢と共訳でマンスフィールドの作品集『曼殊斐爾』（商務印書館）を出版。
- 85 Edward Dowden（1843 - 1913） *The Life of Robert Browning. London, Dent & Sons, Ltd. 1915*
- 86 Elizabeth Barrett（1806~1861）、Robert Browning（1812~1889）夫妻はイギリス、ヴィクトリア朝の詩人。

- 87 原文は英文。前掲 Dowden1915, pp.94-95 より引用されている。
- 88 鄭振鐸（1898-1958）福建省長楽の人。文学者、考古学者。1921年文学研究会の創設者の一人。
- 89 張幼儀（1890-1966）浙江省嘉興の人。徐志摩の初めの妻。当時はすでに離婚。ドイツ留学中であつた。
- 90 江蘇省（金陵道）首都市の北。
- 91 鐘山の別名、首都市の北にある。
- 92 山東省済南城西北隅にある。
- 93 拙稿王省杭州市西北、西湖の北。
- 94 江蘇揚州市城内にある。
- 補注1 西湖にある小さい島。西湖三島の一つとして知られる。
- 補注2 林徽因（1905-1955）の幼名。〔徐迺翔他編『中国現代文学作者筆名録』湖南文芸出版社、1988、407頁〕